

筑波大北アフリカ研究センター

産油国、砂漠、イスラム過激派テロ……。北アフリカについてこうしたイメージを思い浮かべる人が少なくないが、これらはごく一面の話だ。筑波大北アフリカ研究センターは、日本ではなじみの薄いこの地域に10年前から注目してきた。地域研究にとどまらず、技術文化や宗教など幅広く研究。成果を企業や大学などに還元し、日本と北アフリカの架け橋となっている。

同センターの研究対象はエジプト、リビア、チュニジアなど地中海からサハラ砂漠の間に位置する国々。なかでも、センター設立のきっかけになったのはチュニジアだ。2000年代初め、チ

知の明日を築く



センターには外国人研究者も多く在籍する

技術・宗教 日本とつなぐ



筑波大教授で同センター長の磯田博子は、組織の特徴について「地域研究よりも、地域にあるモノを使った研究をしている機関であること」と指摘する。

チュニジア政府が首都チュニス近郊に科学・産業技術集積拠点（テクノパーク）を設ける話が持ち上がり、日本が政府開発援助（ODA）で高等教育や研究開発を支援することにになった。チュニ

設立当初は約10人だった同センターには現在、学内外から200人を超える研究者が集まり、バイオサイエンス、環境・エネルギー、人文社会科学

学、ICT・イノベーションの4部門に分かれて研究を進めている。なかでも、バイオサイエンス部門のオリーブに関する研究は目を引く。磯田によると「厳しい環境で育ったチュニジア原産のオリーブのなかには、欧州産に比べて健康や病気予防によいとされるポリフェノールが10倍以上含まれるものもある」。現在、医薬品や機能性食品に応用するため

域だ」という。「例えば、北アフリカの住民には生活習慣病が少ない」。過酷な環境にもかかわらず、70歳以上まで生きる人も少なくないそうだ。サハラ砂漠の砂を使っ

て太陽光発電につなげようという研究も進めている。サハラ砂漠の砂には、半導体や太陽電池の基板材料となるシリカが豊富に含まれる。環境・エネルギー部門では砂から太陽電池に適した高純度シリコンを精製し、太陽光発電や砂漠の緑化につなげるのが目標だ。

北アフリカに進出する日本企業への助言も手がける。北アフリカや中東はいま、健康ブームが起きている。日本の健康食品への関心も高いが、イ

2001年の米同時テロ以降、北アフリカ諸国と欧米諸国の関係は冷え込んだが、日本との関係は良好だ。アジアで最初の先進国となった日本に対する敬意も強い。日本と北アフリカをつなぎ、実際の研究に取り組んで共通の課題を解決し、共存共栄する。筑波大北アフリカ研究センターの役割は年々重みを増している。

（岸田幸子）

電子版に関連記事 ▼Web刊↓紙面運動